

文科省のオープン・リサーチ・センター整備事業選定3事業

《東アジア世界史研究センター》

「井真成墓誌」の謎を探る

7世紀から9世紀にかけて「中国」に渡った留学生に焦点に当て、歴史的意義や東アジアの国際関係を探る「古代東アジア世界史と留学生」プロジェクト(07年4月採択)の初の公開講座とシンポジウム(社会知性開発研究センター／東アジア世界史研究センター)が10月27、28の両日、神田キャンパスで行われた。2日間で261人が聴講、同テーマに寄せる関心の高さをうかがわせた。

公開講座のテーマは「井真成一日中の研究状況」。飯尾秀幸教授が司会を務め、日本側からは荒木敏夫教授(本学副学長、東アジア世界史研究センター代表)が当時の日本・中国・朝鮮半島の情勢と日本書紀や宋書などに記載されている留学生の様子を紹介。矢野建一教授は、本学大学院が発見に大きく関与した「遣唐使・井真成墓誌」の解明について、現在までの研究成果と今後の課題を報告した。中国側からは西北大学の王維坤教授が同墓誌の発掘経緯や研究成果をはじめ、「渡航年は?」「日本名は?」など「井真成の謎」についての自説を展開した。

翌日のシンポジウムでは、金子修一・國學院大学教授、古瀬奈津子・お茶の水女子大学教授、加藤謙吉・成城大学兼任講師、石見清裕・早稲田大学教授、矢野教授が講演。荒木教授を加えた6人による討論が繰り広げられた。会場から寄せられた質疑に応じ、活発なディスカッションが行われた。



▲質疑に答える荒木教授(左端)。円内は墓誌について説明する王教授

文科省のオープン・リサーチ・センター整備事業選定3事業

《歴史学研究センター》

教科書の中の「仏革命」検証 — プロジェクト最後の公開講座

フランス革命と日本・アジアの近代化プロジェクトの第6回公開講座(社会知性開発研究センター／歴史学研究センター)が10月6日、生田キャンパスで開催された。テーマは「フランス革命と歴史教育」。革命期のフランスの教育や、教科書の中の「フランス革命」などを研究者3人が報告。150人が聴講した。

近江吉明文学部教授(歴史学研究センター代表)が開会のあいさつ、続いて山岸拓郎経済学部非常勤講師が講演。フランス革命期における公教育案について、「タレーラン報告」の分析を中心に、革命前の教育状況と比較しながら話した。

鳥越泰彦麻布高等学校教諭は「歴史教育の中のフランス革命～国際比較から考える～」と題して講演。日米の中等教育に使われている世界史教科書での「フランス革命」の位置付けを比較・検証した。

最後は日暮美奈子文学部准教授が第二次世界大戦後のドイツの歴史教育について、占領期、東西分割期、現在(再統一期)それぞれの中教育教科書を中心に分析した。

なお本年度は同プロジェクトの最終年にあたり、今回は最後の公開講座となった。11月24、25の両日には、神田キャンパスで本プロジェクト最後を飾る国際シンポジウム「フランス革命研究とミシェル・ベルンシュタイン文庫」を開催する。



山岸拓郎氏



鳥越泰彦氏



日暮美奈子准教授

文科省のオープン・リサーチ・センター整備事業選定3事業

《言語・文化研究センター》

海外から第一線の研究者招く

10、11月に国際公開講座開催

中世英文学と英語学の研究を進めている「Anglo-Saxon語の継承と変容」プロジェクト(社会知性開発研究センター／言語・文化研究センター)は、海外から第一線の研究者を招き、第2回・第3回の国際公開講座を神田キャンパスで開催した。研究者を中心に延べ250人が聴講した。

10月19日から21日まで開催された講座のテーマは「社会言語学への招待—音声学・談話構造の研究」。メインの講師は、音声学の権威として国際的に活躍してきたロンドン大学のジョン・ウェルズ名誉教授。3日間連続で講演を行い、訪れた聴講者は英語音声学への理解を深めた。

11月3、4両日の講座は「中世英文学とゲルマン世界」をテーマに開催された。中世英文学の代表的宗教頭韻詩である『農夫ピアズ』と深く関係を持つ諸作品の研究を行っているヘレン・バール博士(オックスフォード大学)とゲルマン語言語学の研究を続けているジョン・オレ・アスケダル教授(オスロ大学)を招き、「英語」と関連の深い分野での講演となった。さらに『アーサー王物語』と中世イタリア文学『デカメロン』に関する講演も行われた。

3日の冒頭、言語・文化研究センター代表の松下知紀文学部教授は3年目を迎えたプロジェクトの活動報告を行い、海外から多くの研究者を招いての国際公開講座開催や、中英語で書かれた写本の購入、情報工学を利用した研究など幅広い成果を紹介した。

12月7日(金)には本学が所蔵する中世西洋写本の内覧会を生田キャンパスで行う。



▲会場からの質問に答えるウェルズ名誉教授



▲会場で講師のヘレン・バールさんに質問する松下知紀教授

[大学院商学研究科]

顧客密着の中小企業へ

第一線の経営者と学ぶ

「実践経営戦略」開講中

大学院生が中小企業の経営者らと共に受講する大学院商学研究科の特殊講義「実践経営戦略」(黒瀬直宏教授)が10月13日からスタートした。



同講義は商学研究科(ビジネスコース)が独立行政法人中小企業基盤整備機構関東支部・中小企業大学校東京校と共同で開講したもの。活躍中の企業の経営者からマーケティング、人材開発、組織活性化、ネットワークなどの経営手法や体験を聞き、ディスカッションや発表を行う。企業の経営者、幹部、後継者らと机を並べ討論することで通常の授業にない参加・体験型授業となる。

初日の13日には30人が出席し、黒瀬教授の講義「中小企業の市場創造戦略—自分の仕事は自分で創り出す—」を聴講した=写真。同教授は、今後の中小企業は、大企業依存型から顧客に密着する市場自立型への脱却が求められるとし、情報を生のデータでとらえる「場面情報」発見を活発化させるなど、状況に応じた戦略を持つことが重要と語った。

講義の後、受講生一人ひとりが自己紹介。「研究する分野の第一線で活躍する方々と学ぶことで大いに刺激を受けた」との話が出た。中小企業側の受講生(16人)の職種は主に製造業、卸売業などで、仙台、豊橋、広島など全国から参加している。「実践的経営のノウハウを取得するだけでなく、大学院生の若々しいセンスに触れるいいチャンス」と海堀昇平・中小企業大学校東京校校長は期待を込めて語った。開講は2008年1月12日までの隔週土曜日、計7回。

東京信用保証協会と産学コラボ企画

「中小企業の創業のポイント」

大学院商学研究科は、都内の中小企業を経営面と資金面からサポートする東京信用保証協会(横山洋吉理事長)と、「中小企業の創業のポイント」をテーマとする起業家向け共同公開講座を開催することとなり11月9日、生田キャンパスで、開講にかかわる合意書を取り交わした。



▲小口研究科長(右)と田中豊東京信用保証協会理事

講座は、同協会の中で創業支援を専門とする「創業アシストプラザ」がもつノウハウと本学の研究ノウハウを融合させた産学連携企画。小口登良研究科長は、「今回をきっかけに中小企業研究の第一人者が集まる本研究科の特徴を生かし、さらなる連携をしていきたい」と語っている。講座概要は次のとおり。詳細は協会ホームページで。

日時=12月15日(土)・13時30分~16時45分

場所=同協会本店会議室

プログラム=「中小企業の経営戦略」(伊藤和憲本学商学部教授)ほか

定員=40人(先着順)

申し込み=電話 03(3272)2279へ。本学学生は大学院事務課へ。

